２０２４／０３／１０　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　牧師

主　　題：御言葉が描く霊的リーダーの姿：長老
聖書箇所：テモテへの手紙第一　３章１－７節

テーマ：御言葉が描く霊的リーダー“長老”とはどのような存在か？

今朝は、最近ずっと学んでいるコロサイではなく、今回と次回は同じパウロの記したＩテモテ３章から、「みことばが描く霊的リーダーの姿」について考えてみたいと思います。もっと言えば、教会でリーダーとして仕えている「長老」また「執事」と呼ばれる存在がいったいどのような存在なのかを、新年度を間近に控え、改めて神様のことばから考えてみます。そして特にきょうのこの時間は、「長老」「牧師」についていま一度学んでみたいと思います。

まずは少し質問があります。皆さんが今、「長老」ということばを耳にすれば、どんな人の姿を思い浮かべるでしょう。「牧師」と聞けば、どんな働きをしている人を考えるでしょう。いろんな場所や機会に聖書を教えている、そんな人物でしょうか？教会のお金、財政を取り扱っている、そんな人物でしょうか？教会のさまざまな規則やまた物事を決定する、そんな人物でしょうか？以前、ある子に真顔で言われました。「崇志くんは日曜日に話す以外、いつも暇してるんでしょ？」と。名誉のためにだれとは言いません…。その時は私も笑いましたが、ある意味これは多くの人が抱いている疑問かもしれません。いったい長老や牧師と呼ばれる人たちは普段何をしているのだろう…と。このように私たちの間では、特にいろいろな考えが思い浮かぶ「霊的リーダーの姿」。もちろんこの点について、聖書は大切なことをはっきりと私たちに教えてくれています。教会に霊的リーダーというものを与えられた神様は、ただなんとなくそれを与えたのではありません。ご自身の描いておられるまさにその長老を与えられました。では、その「霊的リーダーの姿」とは具体的にどのようなものなのか、そのことをきょうは改めて一緒に考えてみます。

でも、もしかしたら今、皆さんの中にはこんなふうに思っている人がいるかもしれません。このように霊的リーダーの話になると、いや別に私は長老でもないし、この先、霊的リーダーになりたいとも考えていません。教会にリーダーがいるのは知っているけれど、自分とはあまり関係がありません。だから、これから話されるその内容は、自分には結びつかないと思います…と。もしそのように感じる人がいるなら、これから見ていく内容がなぜ私たちにとって重要なものなのか、少なくとも四つのことを覚えていてください。

まず一つ目は、これから私たちが見ていくこのテモテ３章に描かれている霊的リーダーの姿は、すべてのクリスチャンが目指すべき成熟した信仰者の姿だ、ということです。これから私たちが見る長老の資格として挙げられている霊的特徴は、なにも特別な人にだけ当てはまるものではありません。恵みによって救われて、キリストに似た者へとますます変えられていくことを願っているすべての者が、ここにいる私たちひとりひとりも目標とするべきその基準がここには記されているのです。だからこそ今、たとえリーダーであろうとなかろうと、この先そうならなかったとしても、ぜひ私は神様が描いている霊的な人物として今成長しているのだろうかと、みことばに照らし合わせながらぜひ吟味してみてください。

二つ目に、これから見ていくこの箇所は、教会の長老がいったいどんな存在なのか、そしてどんな働きをするのかを、はっきりと教えてくれているということです。 ご存じのとおり、今のこの浜寺には私を含めて四人の長老が立てられています。そのリーダーたちが果たして、本当にみことばの示す基準に従って忠実に歩もうとしているかどうか、それを吟味してみてください。また、どんな働きやどんな責任を神様から与えられているのかということを覚えて、そしてぜひ祈りによって励ましてください。

三つ目は、特に男性のみなさん。私たちが見ていくこの箇所に記されているリーダーの姿というのは、皆さん自身もそれぞれ追い求めていくべきものだということです。この３章の中には、個人としてだけでなく、夫婦や親子関係において、兄弟姉妹や未信者との関係においても、それぞれが目指すべき姿が記されています。だからこそ、霊的リーダーとして神様から託されているその責任や役割を喜んで求めて、そしてともにみことばによって成長していきましょう。またそれと同時に、もし皆さん男性の中に、特にこれまで一度も考えたことがないならぜひこの機会に、自分も将来長老として神様と人とに仕えるというすばらしい働きにつきたいかどうかを、真剣に考えて祈ってみてください。

最後四つ目は、女性の皆さん、この箇所は皆さんにとっても欠かせないものです。まず、先にも言いましたが、それぞれがみことばと照らし合わせながら自分自身の信仰を吟味してみてください。そしてそれに加えて、もし結婚しているなら、あなたの夫がこの箇所に描かれているような歩みをしているかどうかを、夫婦一緒になって考えてみてください。ただ、皆さん、このみことばをもってそれを夫に投げつけるのではなく、ただ粗探しをして非難するためではなく、夫が神様にあって神様に喜ばれる者としてさらに成長することができるように祈って、愛をもって支え励ましてください。またもしまだ結婚していない方がいるなら、この箇所に描かれているような霊的な男性を祈り求めることができるということです。

ひとりひとりにとってこの四つのことを覚えていただいて、神様のことばを一緒に見てみましょう。きょうは、霊的リーダーである「長老」について、Ｉテモテ３：１−７を中心に考えてみます。そしてそのみことばを見ていきながら、二つの質問に一緒に答えてみたいと思います。一つ目は、長老とはそもそもどのような存在か、二つ目は、長老とはどのように選ばれるのか、という質問です。皆さん、今ならどう答えます？そのことを考えながら、ぜひこの箇所に記されている神様のことばをよく学んでみましょう。

Ｉテモテ３：１−７節

「:1 「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」ということばは真実です。:2 ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、:3 酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、:4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。:5 ――自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう――:6 また、信者になったばかりの人であってはいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。:7 また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。」

〇霊的リーダーである“長老”の姿：二つの質問

Ｑ１．“長老”とはどのような存在か？　１節

▶「監督」

さて、まず一つ目の質問から考えてみましょう。「長老」とは、そもそもどのような存在なのでしょうか？そのことを考える上で鍵となることばが１節に登場していました。１節をよく見るとパウロはこう言っていましたね。「**人がもし監督の職につきたいと思うなら、**」と。ここで使われていた「**監督**」ということばにはもともと「何かを見守る人、監視者」であったり、また「何かの世話をする 」と言う意味が含まれています。ということは、早速わかることがあります。教会の霊的リーダーというのは、何よりも教会全体にいつも注意を配っていて、神様から託された群れの世話をしていることが求められる、というわけです。教会の中に何か問題が起こっていないかどうか、ひとりひとりの信仰者が安全で、群れからはぐれるようなことが起こっていないかどうか、そのようなことを絶えず監督し、見守っているという責任、務めを負っているのです。それが「**監督**」ということばが教えてくれることでし

た。でもこれだけが霊的リーダーの責任ではありません。だからみことばを見ていくと、その務めであったり、また姿というものを聖書は別のことばを用いて描こうとしているのです。それこそが「監督」と並んで使われる「長老」と「牧師」ということばでした。「長老」「牧師」ということばは、別の働き、務めや姿を表すことばでした。

例えばこの三つのことばは、同じ箇所に揃って用いられることがあります。パウロも使徒の中でこのように宣べていました。まず使徒２０：１７「**:17 パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼んだ。**」そして２８節「**:28 あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。**」ここで私たちは「**長老たち**」「**牧させるため**」「**群れの監督**」と三つのことばを見ることができました。この「**牧させる**」というのは「牧師」とも訳せることばです。ですから三つのことばが並んでいるのを私たちはこの箇所に見ることができるのですが、読んでいて気づきます？パウロは三つのことばを別々の人を指して用いていたわけではありません。「**長老たち**」に対して「**牧させる**」「**群れの監督**」ということばを使っているのです。ですから、同じ人物に向かって、霊的リーダーとしてのさまざまな務めやその姿を強調しているわけです。もうちょっと具体的に言うなら、「**監督**」というのは、「教会全体にいつも注意を配って、神様から託された者を世話している」という、務めのことを話していました。

▶「長老」

「**長老**」というのは、「その人物が霊的に成熟した者である」という姿を表していました。役割ではありません。その姿でした。この人物がみことばとともに歩み続けているからこそ、その人物の歩みというのは、同じように成熟を目指している群れにとって模範となる姿、そのような存在なのです。それが「**長老**」ということばでした。

▶「牧師」「牧させる」

そしてもう一つ「牧師」「**牧させる**」ということばですが、これはまさに文字どおり、「その人物が教会、神様から託された羊の群れを導く羊飼いの役割を担っていること」を表していました。皆さん、「牧師」の「牧」、「**牧させる**」の「牧」を見てもわかると思いますが、「羊飼い」という役割を担っていることを表しているのです。だから霊的に成熟して、みことばを生きているそのような人物は、みことばをもって人々を教え養い、みことばをもって敵から守り、みことばをもってみずから進んで羊の必要を世話していこうとするのです。それが「牧師」「**牧させる**」ということばの持っている意味でした。この三つのことばは、パウロだけではなく、あのペテロも同じように三つを並べて、そんな霊的リーダーの姿を描いていました。Ｉペテロ５：１－２にこう書いています。よく見てください。「**:1 そこで、私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じく長老のひとり、キリストの苦難の証人、また、やがて現れる栄光にあずかる者として、お勧めします。:2 あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。**」と。（「それをしなさい」…２０１７年度版「世話をしなさい」）最後「**それをしなさい。**」と書いていました。私たちの訳ではちょっとわかりづらいかもしれませんが、２０１７年版を見てみると、そこは「**世話をしなさい**」ということばで訳されています。もう少し今の私たちにわかりやすく言うなら、「監督しなさい」ということばが同じように使われているのです。ですから「**長老たちに**」「**牧しなさい**」そして「監督する」という三つのことばが同じように使われていました。いずれにせよ、みことばが言わんとしていたことは明白でした。教会にあって長老は牧師であって、牧師は監督であって、監督は長老だということです。もちろん教会によって、今の私のように、特に“教える”という働きに専念できるようにと教会から給与をもらって仕えている長老もいれば、別の仕事しながら仕えている人もいます。でも皆さん、たとえどんな長老であったとしても、そこに立場の違いや優劣という

ものは存在していないということです。長老はみな同じ牧師、同じ監督であって、同じ大切な務めや責任を、神様から与えられている存在だというわけです。

少し一緒に考えてみてください。今私たちが見てきたように、教会のリーダーである長老は、自分たちの知恵や自分たちの考えではなく、みことばによって人々を励まそうとします。人々を導こうとします。だからこそ、何よりもみことばを知っているということが欠かせませんでした。群れを養う以前に、自分自身がみことばによって養われ、そのみことばの権威によって、教会を偽りや罪から守ったり、愛をもって羊を世話したり、教会に仕えようとしていくのです。その土台はいつもみことばにありました。そしてそんな務めを担っているからこそ、長老は一週間の中にあって、日々みことばを学んで、そして何よりも祈りに時間を費やそうとするのです。教会に仕えようとする者たちにとって、その土台、原動力となるのが、みことばと祈りであるからこそ、長老たちはどんなときも、その働きに、その務めに専心しようとするのです。だから日曜日以外は何をしているのかといえば、その働きをしているということです。そして当然、これには大変な労力や時間がかかります。でも皆さん、覚えてほしいのは、ある者たちは自分の仕事を別に持っていながら、それでも神様と教会とを愛して、与えられた務めに熱心であろうとしているということです。そんな長老が、感謝なことに浜寺にも与えられています。私自身も、その長老たちが持っている愛や熱意、そういったものを心から尊敬しています。そして、皆さんにも同じであってほしいと思います。またぜひ続けて、そういったそれぞれの長老たちのために祈ってください。皆さんがよくご存じのとおり、どの長老にも弱い部分や欠けている部分はたくさんあります。私たちもみことばをすべて知っているわけでもありません。まだまだ、ほとんど知りません。だからこそそんな長老のひとりひとりがますますみことばを学んで、それによってまず長老たちが砕かれるように、変えられ続けるように、そしてますます神様と教会に仕える羊飼いとして、霊的に成熟した者へと成長できるように、祈りのうちに覚えてください。特にほかに仕事をしているような者たちは、そこでのバランスを考えないといけなかったりします。皆さんに仕えるために、みことばと祈りの時間に専心できるようにと、ぜひ皆さん祈りに覚えてください。それがなかったら働きはできないということです。また加えて、こういった長老、牧師、監督として仕えていきたいと願う者が、新たに教会の内に起こされるようにということも、私たちは一緒に覚えて祈りましょう。かつてイエス様はこのように口にされていました。マタイ９：３７−３８「**:37 そのとき、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。:38 だから、収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。**」状況は変わっていません。神様のために働くことはすばらしいことであり、キリストの福音やみことばを必要としている人は数多くいるということです。それなら、私たちはまず自分に与えられた責任を忠実に果たし、また働き手が与えられるようにと、ともに祈り続けていきましょう。一つ目の質問、神様が教会に与えておられる「長老」とはどのような存在なのか、その答えは、この霊的リーダーは、霊的に成熟した者、みことばをもって人々を教え養い、神様から託された羊をいつも見守って世話をしようとするそんな羊飼いたち、でした。

Ｑ２．“長老”とはどのように選ばれるのか？　１－７節

続けて二つ目の質問を考えてみましょう。「長老」とはどのように選ばれるのでしょうか？ちょっと立ち止まって考えてみてください。今私たちが見たこの教会の長老という存在は、非常に大きな責任と務めを神様から託されていました。神様がご自身の血をもって買い取られたその神の教会を牧するという働きを与えられていたのです。果たして、こんな務めをだれもが好き勝手に担うことができるのでしょうか？それとも、神様は何かしらの明白な基準を設けておられるのでしょうか？もちろん答えは後者でした。みことばは、長老を選ぶに際して明白な資格を挙げているのです。だれでもよいのではありません。教会の長老にふさわしいその資格を満たした人物だけがその職につくことが可能だったのです。では、いったいどんな資格を満たしていることが必要なのでしょう？どんな具体的な特徴が霊的リーダ

一のうちに見られることを、神様は求めておられるのでしょう？私たちはパウロのことばから、その特徴を大きく二つ見て取ることができます。

ａ）仕事に強い願いを持っている人物　１節

▶「つきたいと思う」

一つ目の特徴、それは、「仕事に強い願いを持っている人物」です。もう一度１節をよく見てみるとこのように言われていました。「**「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」ということばは真実です。**」と。ここで使われていた「**つきたいと思うなら**」ということばにはもともと「何かをつかもうと手を伸ばす」とか「目標を達成できるように奮闘する」といった意味が含まれています。まるで、ほかのものには目もくれず必死に金メダルを目指して走っているオリンピックランナーのように、このことばは、その心が何かを手にしたいという思いで定まっている状態のことを表すのです。このことばは、強い願望、また、それに伴って生じる行動を表していました。

▶「求める」

また続けて出てきていたもう一つ、「**すばらしい仕事を求めること**」とあります。この「**求める**」ということばにも、「何かを手にすることを強く願う」という意味が含まれていました。そしてどちらかというと、この「**求める**」というのは、行動の話ではなくて、心の動機の部分のことを強調していました。心の底から、何かを手にしたい、何かを望んでいる状態のことを表すのです。

そうすると皆さん、ここでこの二つのことばを用いて言われていたことが想像できます？言われていたことは明白でした。教会の長老になろうとする人物というのは、まず心の内に強い願望を、強い情熱を抱いていることが欠かせない、ということです。ただ、注意してほしいのは、その願望というのは、「長老」という肩書きに対するものではありません。長老の立場や権威というものに対するものでもありませんし、周りからの称賛や尊敬というものに対してでもありません。ではいったい何に対して強い願い、強い願望を持っているのか？みことばはこう言っていましたね。「**それはすばらしい仕事を求めることである**」と。何を求めているか？「**すばらしい仕事を求め**」ているのです。言いかえれば、その人物の情熱、願望は、長老の仕事をしたい、長老の働きをしたい、というこの部分に定まっているというわけです。長老の務めがいったい何なのか、長老の責任がいったい何なのかということを知ったとき、その人の心が強く願うのです。強く望むのです。私は、神様と教会とに仕える、その仕事がしたいと。ほかのことよりも私は神様と教会に仕えたいと。それが持っている情熱の対象でした。

ちょっと改めて考えてみてください。長老として教会で仕えていくということには、当然いろんな犠牲や難しさも伴います。群れを導こうとしているそのとき、長老はだれよりもいろんな信仰者の深刻な罪の問題と向き合わなくてはいけません。忍耐と愛をもって羊の成長を願って時間をともにしていたとしても、その羊に噛み付かれることもあったりします。霊的リーダーというのは時に容易に、悲しみや失意に心を奪われてしまいそうになる場面に出くわすこともあるのです。でも、だからこそ、長老は強い願いをその内に持っていることが欠かせませんでした。何があったとしても主の働きをしたいという情熱や確信がなかったとすれば、どうなります？するとその心はすぐに折れてしまうのです。でも同時に、長老が教会で仕えることには、困難だけがあるのではありません。そこには、この世では比較することのできないほどの喜びもあります。群れを導いていくそのとき、長老はだれよりも間近で罪人が救いへと導かれていく様子を目の当たりにしますし、信仰者が霊的に成長していく姿を目の当たりにすることもできます。深刻な罪に陥って苦しんでいた人物が心から悔い改めて神様に立ち返るという、そんなすばらしい場面を目にすることもあれば、大きな問題を抱えていた関係がみことばの力によって変えられるという、そんな場面に出くわすことだってあります。またこれらに加えて、忠実に働いた者には神様からの祝福が用意されているということも、みことばは約束してくれていました。さっき見たＩペテロの続きの５：４にこんなふうに書いていました。「**そうすれば、大牧者が現れるときに、あなたがた**

は、しぼむことのない栄光の冠を受けるのです。」と。ですから霊的リーダーにはこうして良い時もあれば悪い時も難しい時もあります。絶えずいろんな波が押し寄せてくるのです。だからこそ、その中にあって、神様と教会とに何があっても仕えたいという、結局のところ、神様だけがその人の内に与えることのできるその強い願望、強い熱意を持っていることが、まず長老につくものにとって欠かせない資格、一つ目の特徴でした。

ｂ）霊的に成熟した者としてのあかしを立てている人物　２－７節

続けて二つの特徴は、「霊的に成熟した者としてのあかしを立てている人物」です。別のことばで言うなら、教会の長老になろうとするその人物は、キリストに似た者へと変えられることを目指している信仰者の中にあって、周りの人たちがその歩みを模範にすることができる存在だ、ということです。そして特にパウロはこの２－７節で、模範となるべきその範囲に関して、１５個の霊的資質というものを挙げてくれていました。すべての長老が必ず満たしていなければならない１５個、これが成熟した者の特徴、資質でした。それぞれどんなものか簡潔に考えてみましょう。１５個一つずつ見てみましょう。

１）非難されるところがない

まず一つ目の資質として挙げられていたのが、２節にありました。「**ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、**」と。一つ目の資質として挙げられていたもの、それは、「非難されるところがない」ということでした。もちろんこれは、霊的リーダーが、いっさい罪を犯さない、非難されるところが全くない完璧な人物だ、ということを言わんとしているのではありません。もしそうだったら私もアウトです。だれも長老になることなどできません。ここでポイントになるのは、この**「非難されるところがな」**いということばでした。このことばを覚えていてください。もともとこれは、「だれかに掴まれることがない」という意味を含んでいました。つまりこういうことです。非難されるところのない人物というのは、その歩みのあらゆる点において、だれからも何かを執拗に取り上げられて、いつまでも責め立てられることがない、ということです。何度も繰り返しになりますが、罪や失敗を犯さないのではありません。リーダーたちも犯します。でも、罪を犯せば悔い改めて間違いを正し、主の前を忠実に歩もうとしているからこそ、「この部分に問題がありますよ」と掴まれて、そして、掴まれたままずっと責められ続けることはない、というわけです。そしてこれは、模範となるべき長老にとって、最も大切な姿でもありました。私たち信仰者もみな、キリストに似た者へと日々成長していこうと歩んでいるのです。でも、もしキリストに似た者へと成長し続けていくことを教えているそのリーダーの歩みがいつまでも変わらないものだとしたら、それによって説得力というものを失ってしまいます。霊的リーダーにとって、語ることばと実際のふるまいが結び付いていないということは、大問題になるのです。清教徒のひとりリチャード・バクスターもこんなふうに述べていました。「ある人が説教で語っている通りに生きていないのを見れば、人々はその教えにあまり関心を示そうとはしないでしょう。語っている通りに生きていないなら、語っている通りの意味ではないと捉えるでしょう。自分自身も信じていないように見える人物を、人々は信用することなんてほとんどありえないのです。」と。「非難されるところがないこと」これは、模範として歩む長老にとって欠かせない資質でした。

２）ひとりの妻の夫である

次に二つ目の資質として挙げられていたのは、「ひとりの妻の夫であること」でした。ただ少し勘違いしてほしくないのは、これは、「長老になるためには必ず結婚していなければなりません」と教えているのではありません。ここで言われているのは、結婚しているのなら、神様が与えた自分の妻に対して、いつも誠実に愛を示して、性的なきよさを保っていることが求められていたのです。ほかの女性に、また別の何かに目や心を奪われたりするのではなく、まさにキリストが教会を犠牲的な愛で愛していたように、夫は妻を変わらずに愛し、養い導いていくことが問われていました。でも同時に、これは

結婚している人だけではありません。もし結婚していないのなら、その者も同じように自分自身の歩みをきよく保って、主の前を誠実な者として歩み続けていくことが求められていたのです。その歩みは私たちひとりひとり全員に問われていることですけれども、模範となるべき長老は、特にその資質を満たしていることが求められていました。

３）自分を制する

４）慎み深い

続けて三つ目と四つ目の資質は、「自分を制すること」と「慎み深いこと」でした。同じ２節に続いています。そしてこの二つはよく似ている部分があります。でもポイントは、前者の「**自分を制**」するというのは、特に、その人物が思慮深くて、自分の欲、感情をきちんと制御することができることを表しています。そして後者の「**慎み深**」いというのは、周りの状況や人に流されるのではなくて、みことばに基づいて、自分の考えや判断をきちんと制御できることを表していました。みことばによって、自分の欲や感情を制御すること、そしてみことばによって、自分の考えや判断を制御すること、この二つが求められていたのです。

見てきたように長老の大切な務めには、みことばを教えて、人々の課題や問題に向き合うことが含まれていました。考えてみてください。そんなときに霊的リーダーが、いつも感情に左右されるような人で、物事を慎重に判断することができなかったとしたら、人々の必要を満たすよりも自分の欲を優先するように心が捕らわれていたら、当然そのような者は群れを正しく導いていくことはできないのです。ですから「自分を制すること」も「慎み深くあること」も、みなに問われていることでしたが、模範となるべき長老にとっては決して欠かすことのできない資質でした。

５）品位がある

五つ目の資質として挙げられていたのは「品位があること」でした。この「**品位があ**」るということばは、もともとのギリシャ語には、今の“コスメ”の語源になる“コスメオス”ということばが使われています。男性の皆さんはわかりませんが、女性の皆さんはピンとくるでしょう。考えてみてください。女性の皆さんが普段コスメ、化粧品を使っている理由は何ですか？たぶん身だしなみを整えるためですよね。整えるわけです。おもしろいのはここでパウロはそのことばを用いて、長老は品位ある者として歩んでいるようにと宣べていました。言いかえれば、長老の歩みというものがきちんと整ったものであることを求めている、というわけです。人々から尊敬を集めるような秩序正しい歩み方であることが求められていたのです。このように今私たちはいくつか見ましたが、ある人物がいつもみことばに堅く立って、自分を制しながら、一貫して歩み続けているのなら、そんな誠実な歩みは、周りの人々の関心や信頼を勝ち取ることに繋がるでしょう。そう思いません？それが「品位がある」ということでした。

６）よくもてなす

六つ目の資質として挙げられていたのは、「よくもてなすこと」でした。実はこの「**よくもてな**」すということばは、もともと「愛情」や「愛」を意味するギリシャ語と、「見知らぬ人」という意味を持つギリシャ語の二つがくっついて成り立っているものでした。ということは、意味が想像できますよね。そこから私たちが読み取れる意味は、自分と関わりを持たない見知らぬ人に対する愛を表していたのです。これも私たちひとりひとりにも問われているのです。私たちは隣人を愛するのですが、おそらく私たちも自分の家族や親しい友人たちに愛を示すことは、比較的容易に喜んでそれをしようとするでしょう。でも、もしこれが、自分と全く関わりのない人たちやあまり親しみのない人であれば、果たして同じように愛を示そうとするでしょうか？それとも、ためらいや躊躇、難しさを覚えないでしょうか？私たちひとりひとりに問われていることでした。でも同時に、人々の信仰の成長のために仕えているその霊的リーダーは、たとえ相手がだれであろうとも喜んで相手の必要を満たそうとする、いつでも愛やあ

われみを示そうとする、その態度というものが絶対に欠かすことのできないものだったのです。「よくもてなす」ということ、それは模範となるべき長老にとって欠かすことのできない資質でした。

７）教える能力がある

七つ目の資質として挙げられていたのは、「教える能力があること」でした。気づくかもしれませんが、これはほかの１４個の資質と少し違って、霊的リーダーの資質や品性よりも、能力の部分を強調しているものでした。ことばでもわかりますよね。「**教える能力があ**」ることと言われているのです。長老は、ただみことばを知っているだけではなくて、その真理を人々にわかりやすく教えることのできる能力を持っていることが重要だったのです。でもどうしてわかりやすく教える能力が必要なのでしょう？それは、きょう私たちが最初から見てきたように、羊飼いである長老の大きな務めというのは、みことばを自分が学んで、そして、そのみことばによって羊を導いていこうとするところにあったからでした。教えていこうとする者が教えることができなければ、その責任を果たすことができないわけです。テトス１：９にも同じように長老の条件が書かれているのですが、そこでもパウロはこのように言っていました。「**教えにかなった信頼すべきみことばを、しっかりと守っていなければなりません。それは健全な教えをもって励ましたり、反対する人たちを正したりすることができるためです。**」長老の責任は、みことばをもって励ましたり、また反対する人たちがいるならその者たちを正してあげることが必要でした。でも皆さん、自分たちの知恵でするわけではありません。みことばによってそれをなすというわけです。公の場であろうと個人的な場であろうと、みことばでもって人々を導いていこうとするからこそ、その務めのためには、「教える能力」というのは欠かすことができない資質でした。

８）酒飲みでない

八つ目の資質として挙げられていたのは、「酒飲みでないこと」でした。３節の頭に書いています。でもこれも、長老の務めというものがどんなものかを理解していれば、容易になぜこれが必要なのかを理解することができます。どんな務めが与えられていました？長老は、どんなときも物事を正確に判断して、みことばによっていつも教会を教え導いていこうとするのです。その務めをきちんと主の前に果たそうとするなら、その人物は酒に支配されていたり、酒に酔っていて、それに溺れているようなことがあってはならない、というわけです。それが八つ目でした。

９）暴力をふるわない

１０）温和である

１１）争わない

次に三つまとめて見ますが、九、十、十一個目の資質として挙げられていたのは「暴力をふるわない」ということ、「温和であること」、「争わないこと」でした。あえて三つを言うのは、これら三つは非常に密接に関連しているからです。どういうふうに関連しているのか？まず、この「**暴力をふるわ**」ないというのは、怒りや不満などを覚えたときに、その感情をすぐに実際の行為に移さないことです。暴力をふるう人というのは、思った感情のままに動くのです。だからそのような者ではないこと、が言われています。次に出てきている「**温和で**」あるは、たとえ理不尽な扱いを受けるようなときでさえ、忍耐をもって相手を赦し、親切に接することでした。皆さん、繋がりが見えますか？怒りや不満などを覚えたときに、何をするのでしょう？感情をすぐに実際の行為に移さないだけではなくて、それがたとえ理不尽だったとしても忍耐を持って相手を赦し、親切にしようとするというわけです。それに加えてもう一つ、「**争わ**」ないとは、人との言い争いを避けて、平和を築くことを追い求めることでした。そしてこれも繋がりが見えますか？怒りや不満を覚えたときに、それを実際に行動に移すのではなくて、たとえそれが理不尽なものであったとしても、忍耐をもって相手を赦し、親切にするだけではなくて、言い争うのではなく、平和をいつも築こうとするのです。そのことを追い求めていこうとするわけです。そして、これは、私たち信仰者ひとりひとりにみことばが求めているものでもありました。でも、

長老はそれを模範として示す者として、この資質を満たしていることが求められていたのです。長老は、短気でも、ことばやふるまいにおいても暴力的であってもいけません。反対にいつも寛容で忍耐深く、穏やかな人物であることが求められていました。「暴力をふるわない」「温和で」「争わないこと」これが、模範となるべき長老にとって欠かせない資質でした。

１２）金銭に無欲である

十二個目の資質として挙げられていたのは、「金銭に無欲であること」でした。３節の最後に記されています。かつてイエス様もはっきりと言われていました。マタイ６：２４「**だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。**」と。私たちには、中立の立場はありませんでした。神様に仕える生き方をしていくのか、富に、神様以外のものに仕えていく生き方をしていくのかは、それぞれの責任だったのです。私たちひとりひとりにとって大切なことでした。でも特に長老は、金銭を愛して自分の利益のために教会に仕えようとするのではありません。長老は、神様と教会を愛して、永遠に価値あるものに心を留めて、神様に満足を見出しながら仕えていこうとするのです。そのような模範を示すことが求められていました。

１３）自分の家庭をよく治める

そして十三個目の資質として挙げられていたのは、「自分の家庭をよく治めること」でした。４−５節にそのことが記されています。そこをもう一度見てみると４−５節はこう続いています。「**:4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。:5 ――自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう。**――」ここで注目してほしいことばが特に二つあります。まず一つ目に注目してほしいのは、４節の「**自分の家庭をよく治め**」るというこの「**治め**」るということばです。このことばにはもともと、「リーダーとしての力を行使する」とか「先導する」といった意味が含まれていました。そしてもう一つ、５節の最後のところに「**どうして神の教会の世話をすることが…**」この「**世話をする**」ということばには、相手の必要を満たそうとするその姿が含まれていました。愛や犠牲を伴って相手の必要を満たそうとする姿が、この「**世話をする**」ということばに含まれているのです。そうすると、ここで言われている家庭をよく治める人の姿、その様子とはどんなものなのかを、この二つのことばから私たちは思い描くことができます。この人は霊的なリーダーとして、みことばに立って、家族の先頭に立って導いていこうとするだけでなく、愛と犠牲をもって家族を世話する者だということです。この二つが欠かせなかったのです。そしてその二つの働き、二つの勤めを忠実になし続けているなら、その影響は子どもの内に従順さというかたちでも見て取れるようになるのだと、ここに言われていたわけです。

皆さんここで覚えていてほしいこと、少し思い浮かべてみてください。父親が子どもに対して、主の教育と訓戒によってその子を育てようとします。もちろん私たちもよくわかっているように、子どもも同じ罪人です。それゆえに罪を犯しますし、失敗もしますし、子どもたちも弱さというものを抱えています。でもその度に時間をとって、神様であったり、福音について、その子にみことばから教えてあげて、そのことを一緒に考えようとするわけです。神様が何を喜ばれるのかということもいつも優しく教えて、それをもって導いてあげ、時に間違っていることがあるなら、その子を愛しているからこそそれを戒めてあげようとするのです。それが父親の家庭においての責任でした。こうしてその子どもが何よりも喜んで心から主と主の立てたその親に従順に従っていくことができるようにと、父親は励まし育てていこうとするのです。そして、その働きを家庭でしっかりとなしている人が長老になったときは、どうなると思います？その長老になった者は、まさに家庭でしていたその働きを、教会の中でも同じようにするようになるというわけです。想像できると思いますが、長老も同じように、いろんな人と時間をとって神様の福音について語り続けていかなければいけません。弱さを覚える者と祈ったり、困難を覚

える者を励ましてあげたり、罪に陥ったような者がいるなら愛をもって正してあげようとするわけです。自分自身が家庭の中で行ってきたことを、まさに教会の中でも同じようにしようとするわけです。だからこそ、パウロは宣べていました。５節で「**自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう。**」と。小さな自分の家族をケアできないのなら、それ以上に大きな神の家族をどうしてケアすることができるでしょうと。ですから、「自分の家庭をよく治める」ということは、模範となるべき長老にとって欠かせない資質でした。

１４）信者になったばかりの人でない

十四個目の資質として挙げられていたのは、「信者になったばかりの人でないこと」でした。６節に続いています。「**また、信者になったばかり人であってはいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。**」皆さん、きょう見てきたように「長老」ということばはそもそもどんな意味を持っていました？その者が霊的に成熟しているということを表していました。ですからことばから考えても、霊的に救われて間もない者はその働きにつくわけではないのです。でも特に、なぜ信仰の幼い人が教会のリーダーになることをみことばは求めていないのでしょう？みことばはその答えも教えてくれていました。「**高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです**」と。未熟な者が高慢の罪に陥ってしまわないように、新しい歩みを始めた者がプライドにあふれてむやみにつまずくことがないように、教会は、まだ幼い者が長老という立場につくことをさせないのです。そのようにして彼らのことを守ってあげる必要があるというわけです。

１５）教会外の人々にも評判が良い

そして最後十五個目の資質として挙げられていたものは、「教会外の人々にも評判が良い」ということでした。７節に書いていました。「**また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。**」と。これまでに見てきたように、長老というのは確かに、教会の中にあって、また家庭の中にあって、成熟した者としてのあかしを立てている必要がありました。でも同時に、そのあかしの輪というものは、そこで終わるわけではないということです。それに覚えています？先週私たちがコロサイの中で見たように、すべての信仰者は未信者の前でキリストを宣べ伝える、という責任を負っていると学びました。コロサイ４：５に書いていました。「**外部の人に対して賢明にふるまい、機会を十分に生かして用いなさい。**」と。これは私たち全員に言われていることでした。でも全員に言われていることだからこそ、すべての面で模範となるべき長老はこの点においても、まだ主を知らない教会外の人々の前でも評判の良い者として歩んでいる必要がある、というわけです。

またパウロは加えて最後、こう言っていましたね。「**そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。**」と。何を言わんとしたのでしょう？言いたいことは明白でした。ちょっと考えてみてください。教会の長老が教会の中で正しいことを口にしていながら、外に出たときに、外での歩みというものがそれを全部否定するようなものであったとしたら、その歩みを周りで見ている人たちはどんなふうに思うでしょう？どんなふうに見るでしょう？間違いなくその人が非難されるだけではなくて、あろうことか、語っている福音やそのメッセージ、神様までも軽んじられてしまう、そんな危険があるのです。えっ！この人が教会のリーダーなのですか？この人がクリスチャンというものを語っているのですか？そのように歩んでいないあなたは、ただの偽善者ではないですか？…そのようなことに繋がってしまう危険性があるのです。まさにそのようなことになることは、神様の敵であるサタンが望んでいることでもありました。だからこそ「教会外の人々にも評判が良いこと」これは、模範となるべき長老にとって欠かせない事実でした。

さて皆さん、１５個の資質を見ることできました。そしてきょうは皆さんと一緒に二つの質問を一緒に考えてきました。長老とはどのような存在なのか、そして長老とはどのように選ばれるのか、その答えをみことばの中に見ることができたでしょうか？また、最初にも一緒に考えたように、きょう私たち

が見た特にこの１５個の資質、それを自分自身に当てはめることはできたでしょうか？ぜひ今週一週間、一つでもいいです。自分自身の歩みとみことばが教えているその資質を照らし合わせながら、祈りながら、神様に拠り頼みながら、ますます成長していきたいとともに祈りながら歩んでください。そしてそれに加えて皆さん、今立てられている長老たちのために、またこれから吟味しようとしている来年度の長老の為にも、ぜひ覚えて祈ってください。今の長老たちがますます霊的に成熟した者へと変えられて、そして同時に、神様の教会に仕えたいという強い願いを持った、みことばの基準に沿った霊的なリーダーが与えられるように、ぜひ祈りに覚えてください。そして、神様が喜んでくださるみことばに堅く立つそんな教会として、ますますともに成長していきましょう。